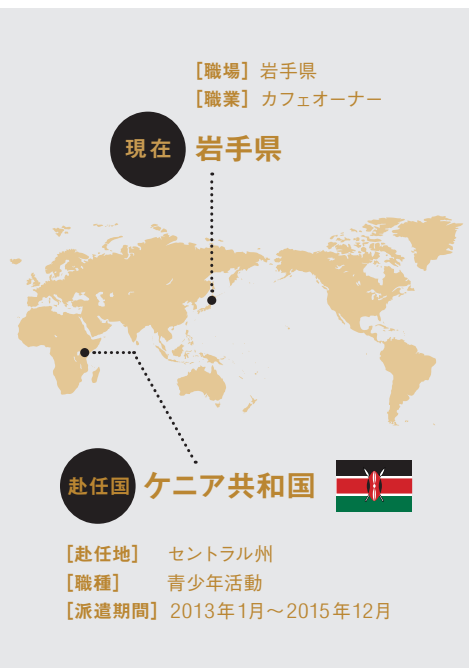




デジタルとローカルを掛け合わせた 未来の村づくり

藤本健司さん 岩手県下閉伊郡普代村 Cafe AWAI オーナー
Kenji Fujimoto

顔の見える関係性を大切にできる暮らし方を模索すること。

そして、田舎の暮らしの価値を高めるために、あえて最先端のデジタルテクノロジーを味方につける。

岩手県北部、人口約二千人の普代村でカフェ「AWAI(あわい)」を営むJICA海外協力隊(JOCV)経験者の藤本健司さん。2025年に地域おこし協力隊の制度を活用してこの村に移住した。その目的は、デジタル技術とローカルな繋がりを掛け合わせ、田舎の暮らしの価値をより高めることだ。カフェを通して、地域の商店街や住民の暮らしに溶け込もうというそのプロセスには、ケニアでのJOCV活動の姿が大きく映し出されていた。

藤本さんの現在地

田舎の価値を模索する

「あわい」という店名は、大和言葉で「間(あいだ)」を意味する。村の外と中、

日本人と外国人、過去と未来などグラデーションを表現し、混ざり合う場所になってほしいという願いが込められている。

藤本さんにとっては人生初となる飲食店。開店当初はあえてコーヒーをメニューに入れず、看板に据えたのはチャイとクラフトコーラだった。「近くに安くコーヒーを出す店があったので、小さな村で競合するのは避けたいと考えました」という合理的な視点には、地域おこし協力隊として地域のためにその役目を果たそうとする戦略家の姿が垣間見える。

それを象徴するのが、JICA海外協力隊起業支援プロジェクト「BLUE」への挑戦だ。藤本さんは、地域内で使えるポイント制度のような仕組み(トークン)

を活用して、現金の流通が少ない過疎地でもお金に依存せずに生きていける新しい経済圏モデルを提案した。関係者からは、率直に「よくわからない」と苦笑されたが、斬新なアイデアと熱意が共感を呼んだ。

「ここでは、スナックで何時間過ごしても一律三千円ということがよくあります。近所の人から高級食材のアワビを



ケニアならではの動物とのふれあい体験



一緒に暮らしてきたワムム更生学校の生徒と共に



お客様に土産土法の美味しい和食を提供いただいているおふたり



お店を訪れる海外からのお客様

もらうこともある。いわゆる損得勘定が当てはまらないんです」村でのリアルな生活を通じて藤本さんが感じたのは、経済的には決して裕福でなくても、底抜けに豊かだったケニアの暮らしそのものだった。

JOCV時代

「お金＝幸せ」からの転換

そもそも藤本さんは、従来の日本的な働き方に違和感を抱き、JOCVを志した。大学卒業後、旅行会社で営業職を経験。がむしゃらに数字を追う日々の中、学生時代から抱いていた夢を諦めきれず、三度目の応募にしてケニア行きの切符を掴み取った。

「途上国の人々は目がキラキラしていて豊かに生きていると聞いていましたが、本当にその通りでした」町を歩けば、誰ともなく挨拶が飛んでくる。知らない人に揶揄されたり、馬鹿にされることもあったが、良くも悪くも人と人が心を通わす日常は、隣に住む人すら知らない東京の生活とは対照的な、人間の温かみや生きる心地よさに満ちていた。

また、ストリートチルドレンの更生施設で青少年活動に従事したことで、大人としての社会的責任を強く意識させられた。「子どもたちに『夢や目標を持って』と言ったところで仕事がない。夢を語るなら、僕たち大人が、雇用の受け皿を作らないといけないと思いました」犯罪と隣り合わせの環境でも明るく生きるケニア人との暮らしを通して、「お金があれば幸せ」という資本主義経済への価値観に疑問を抱くようになっていった。

未来へのビジョン

10年かけて挑む未来の村づくり

「都会と同じ金銭感覚を持ち込むから、田舎は給料が少ないとか、都会に出ないと稼げないといった歪みが生まれるんです。お金という価値基準を手放せば、圧倒的な豊かさが見えてくる」

藤本さんは、安易に貨幣経済を否定するのではなく、デジタルテクノロジーを駆使してケニアで出会った「顔の見える関係性」を、現代のシステムとして再現しようとしている。

その社会実験の足がかりである「あ

藤本健司さん プロフィール

旅行会社勤務を経て、JOCVに参加。帰国後、教育事業に10年近く関わりながらビジネスの経験を積む。2025年、岩手県普代村の地域おこし協力隊に着任。同年、普代村でのビジネスプランをJICA海外協力隊起業支援プロジェクト「BLUE」で磨き上げる。現在は、村の新たなコミュニティ拠点「Cafe AWAII」のオーナーとして、地方における価値あるイノベーションを実践中。

わい」は今、ようやく地域の居場所になりつつある。昼には近所のおばあちゃんが毎日のように顔を出し、夜になれば商店街仲間や役場職員が集う。さらに、東京からUターンした日本料理のプロが厨房に加わったことで、チャイとクラフトコーラから始まったカフェは、その味を目当てに近隣都市から人々が訪れる場所へと変わった。

藤本さんは「村八分にされない限り、ここに10年は残るつもりです」と腹を括っている。自問自答を繰り返しながら、長期スパンでこれからの新しい暮らし方、生き方のモデルを完成させようとしている。

藤本さんへのエール！

株式会社アースカラー
高浜 大介さん



今後の展開を心から応援しています

JOCVで身につけた現場感覚と柔軟さを土台に、普代村で地域の方々と一緒に汗をかきながら、カフェ運営や関係人口づくりなど多面的な挑戦を続けています。彼には人の背中を押す力があります。地域に新しい風を入れるだけでなく、地域の良さを丁寧に守りながら次へつなげていく人です。